

ホテル三日月(勝浦)奮闘記

JATA理事・事務局長 越智良典

春の海が窓二面に広がっていた。3月1日、勝浦の町中に雛人形が飾られる時に、ホテル三日月は営業を再開した。当日は120名、ほとんどは私も含め1ヶ月に及ぶ彼らの奮闘を知って、応援しようという関係者だった。

前例のないオペレーション

話は1月29日に遡る。新型コロナウイルス感染症で都市が封鎖された武漢に全日空の救援機が派遣され、その第1便が帰国した。前例がないオペレーション、JATAにも羽田空港からのバスやホテルの手配の相談があったものの、受け入れてくれるホテルは見つからなかった。

そんな中で、1月の二階幹事長を団長とする日本ベトナム文化経済観光交流団に参加した縁で、ホテル三日月に打診があった。(ちなみに、三日月グループは

ダナン市最大の投資案件を進行中)

腹は決まった

小高社長は「晩考え、国からの正式要請書発行と、千葉県と勝浦市の了解の取り付け、そして社員の安全の確保(医療関係者の駐在や指導)を条件とした上で、「日本で誰かがやらなければならぬなら三日月がやるしかない!」と社員説明会を開催した。「社長、やりましょう!」と中には声を上げる社員もいて、皆が拍手で賛同してくれたことで、心が決まったそうだ。

混乱と風評被害との闘い

しかし受け入れた後は想定外の苦労の連続だった。宿泊予定者も当初の予定人数から大幅に増え、国立国際医療研究センターで検査して陰性だったほぼ全員

190名を経過観察することになった。そのため、相部屋の対応をめぐっての混乱、予定外の滞在へのストレスなどが爆発した。また、風評被害で三日月グループの



和太鼓の演奏による応援パフォーマンス



勝浦中学校の生徒からの応援メッセージ

各ホテルや、勝浦への旅行者は大幅に減った。従業員の子供や家族へのいじめすらあったと聞く。

そんな中、勝浦市が市民説明会を開催した。「なぜ病人が民間施設に隔離されているのか?」の問いに、亀田総合病院の細川先生は答えた。「いい質問ですね。それは、彼らは検査陰性ですから、我々と同じで、経過観察のため隔離されているだけの健常者だからです。病人でない人は入院しないのです。」会場の空気は二変した。

風向きが変わった。「まけるな!」「あと少し頑張ろう!」。ホテルの前の砂浜に滞在者を励ますメッセージが記された。やがて、浜辺では、和太鼓の演奏や灯籠など、様々な応援が行われるように

なった。そして、経過観察期間がすぎ、最終検査で全員陰性、従業員にも感染者を出さず終えた。ホテルを出発する際には、子供たちによる手書きのメッセージが送られ、市民による盛大な見送りが行われた。

学ばべき三日月の闘い

三日月の取組みは私たちと新型コロナウイルス感染症との闘いの小さなコマかもしれないが、その中に学ばべきものは大きい。二次感染を防ぐ管理。医療機関と自治体との連携。何より一致団結して困難に立ち向かう組織力。

三日月の小さくも大きな戦いを「いいね!」と思ったら是非一度でかけてください。